

第 87 話〈精錬所〉の要約と参考資料

第 87 話〈精錬所〉の要約

1934 年、中島商事が伊形村（現延岡市）土々呂にスズ精錬所建設を決めると、さびれていた港が東洋に飛躍する商業港へーその夢は 10 年後、太平洋戦争が始まって東南アジアから安価なスズが大量に運ばれだし、国内のスズ鉱は不要になって夢は空しくついでました。

第 87 話〈精錬所〉の参考資料

87-1 中島財閥の解体

森川英正著「日本財閥史」

私が財閥をどう規定しているかの説明から論述を始めよう。その方が、本書の読者に対しても親切であろう。私は、財閥を、「富豪の家族・同族の封鎖的な所有・支配下に成り立つ多角的事業経営体」と規定する。ここで、同族とは、先祖を同じくする家族の集団のことであり、封鎖的には、家族同族以外の参加を拒否するという意味をこめている。要するに、家族同族（以下、特別の場合を除き、一括同族と呼ぶ）の封鎖的所有・支配と多角的事業経営の 2 要因が、私の財閥規定の 2 本柱である。（P16~17）

まして、日産以外の新興コンツェルン、日本窒素肥料（社長、野口遵）、日本曹達（社長中野友禮）、昭和電工（社長森轟昶）、理化学興業（会長大河内正敏）、中島飛行機（創業者中島知久平）を中心とする、主として重化学工業分野の企業集団は明らかに財閥ではなかった。（P211）

まず、21 年 9 月、三井本社、三菱本社、住友本社、安田保善社、富士産業の 5 社を持株会社に指定したのを皮切りに、83 社の持株会社指定を行い、持株を持株会社整理委員会に提出させた。中でも、財閥本社は、必要手続き完了後、解散させられた。

なお、富士産業は旧中島飛行機である。財閥と規定するには問題があるが、中島知久平一族の封鎖的出資によっていること、多数の系列企業を抱えていること、戦争遂行に協力したこと等によって、財閥解体措置の対象とされたのであろう。次いで、22 年 3 月、三井、岩崎、住友、安田、中島、浅野、大倉、古河、野村、鮎川の 10 財閥の主人公であった 56 家族が、財閥家族に指定され、資産凍結と持株の持株会社整理委員会に対する提出を命じられた。財閥家族の成員は、一切の財閥系企業の役職を辞任しなければならなくなった。23 年には財閥同族支配力排除法が公布された。（P223-224）

87-2 航空機生産に占める中島飛行機会社の割合

航空機生産（高橋康隆著「中島飛行機の研究」P74 より）

太平洋戦争下の航空機メーカーは、民間が 17 社、2 つの軍航空廠で計 19 メーカーで

あった。とはいっても 1941 年現在において 10%以上を生産する主要メーカーは中島、三菱、川崎、立川の 4 社であり、これら 4 大メーカーが全体で約 5000 機生産のうち約 80%をしめていた。(略) しかもその 4 社のなかで、もっとも有力であったのが中島と三菱でありそれは表示したごとく、両者で全航空機生産の 40~50%をしめていた。中島は第 1 位の航空機メーカーであり、全体の約 30%、三菱は第 2 位で約 20%を生産していた。

航空機エンジン生産 (高橋康隆著「中島飛行機の研究」P76 より)

つぎに航空機エンジン・メーカーをみてみよう。メーカーは民間が 10 社、2 つの軍航空廠で計 12 メーカーであった。(略) 1941 年において主要エンジン・メーカーは三菱、中島、日立、川崎の 4 社であり、(略) こうして航空機エンジンの場合、機体以上に 4 大メーカーへの生産が集中していたといえる。それらのしめる割合は 80~90%であった。その 4 社のうちでとくに注目しなければならないのは三菱と中島の圧倒的な地位の高さである。両者ではほぼ 60%をしめており、第 1 位のエンジン・メーカーは三菱であり (30~40%の占有率)、第 2 位は中島であった (同じく 30%)。こうして航空機エンジンは三菱と中島を主体に民間メーカーがそのほとんどを生産したのであった。

8 7 - 3 中島商事への期待

1934 年 6 月 11 日延岡新聞「工場の設置決定まで 東洋一てふ観測 極秘の裡に話は進む 誘致に成功した伊形村」

中央財界にありて活躍すると共に飛行機製作といふ国家的事業を営める中島財閥の手で土々呂桶河に設立と決定した錫の精錬工場はまさに東洋一を誇る素晴らしいもので (略)。見立鉱山を始め全国内の錫鉱は此処 (シンガポール) までやらねば精錬が出来ない。かかる国内的な状況に着眼し、且つは国家的な立場から巨費を投じて大精錬所を建設以て自給自足を図りたいといふ念願に出発したのが中島飛行機製作所の実権を握る中島門吉氏で、果敢実行を尊ぶ実業家として直ちに建設地の物色にかかった。

6 月 16 日 天岩戸に 中島商事の大選鉱場

西臼杵郡岩戸村土呂久、及び中野内に夫々錫の採掘を開始しつつある、東京中島商事株式会社は、総支配人北伴治氏をして直接極秘裏に交渉中の處、価格の点において一時行詰りの形であったが、岩戸商工会長竹内勲氏の斡旋により最近急速に進展、14 日社長中島門吉氏の実地調査の結果、位置は東岸寺に決定。15 日、使用土地 2 万 5 千坪の買収並に水利権分譲の調印を終った。この大選鉱場が完成すれば、中野内鉱山並に土呂久鉱山より何れも架空索道で鉱石を運搬、1 日 500 噸の選鉱能力が発揮出来、使用人員は採鉱、選鉱合せて約 1 万人と称せられてゐる。これが実現の暁には殆んど接続せる天の岩戸の町は特に異常の発展を見るであらうといはれてゐる。

竹内勲氏は左の如く語った。

非常時日本の最近の錫の需要は約 7 千噸、これに対する内地の産額は僅かに壺千噸、用途は毒瓦斯、飛行機、チューブ等々際限がない、ここに着眼した中島氏は実に非常時日本の救世主だ。われ等は、この国家的大事業家に対して献身的の御援助をしたいと思いますと思つてゐる。

1934 年 8 月 31 日～9 月 5 日延岡新聞連載「竹内勲 中島商事の土呂久鋳山を語る」

貧弱なる竹内家によって支へて来た土呂久鋳山外録も今国家的事業家中島知久平氏の主宰する中島門吉氏を社長と仰ぐ中島商事株式会社の御力によって再び嘉永年間の如く或は遠く永禄天正、三弥の隆盛時代の盛大を再び実現せんとしてゐるのである。

1934 年 11 月 9 日延岡新聞「鋳業大国出現 県北に 3 大事業 一大壯觀を呈するだろ」

中島商事の岩戸鋳山は中野内、土呂久、長谷の 3 ケ所を中心として鋭意錫採鋳に努めつつあるが、一方選鋳場の建設も、土々呂精錬工場の完成と平行的に進捗せしむる方針のもとに着々準備をなしつつあり、各種の機械類は殆んど全部到着し、南延岡駅前の同会社倉庫に格納し、すでに一部は東岩戸岸寺の選鋳場建設現場に運搬され、尚機械すゑつけの基礎工事には着手してゐるので本年中には大体竣工の予定らしく特に中島本社より堤克敏氏が、岩戸、延岡、児湯郡の中島事業の全般にわたり指揮監督のために出張してをり、本年中は岩戸延岡間に滞在の筈で、又岩戸鋳業所には内海所長が技術部を主宰してゐる。

何れにしても中島の選鋳場が完成の上は天下の三菱槇峰鋳山、次で東洋鋳山株式会社の見立鋳山並びに中島商事の岩戸鋳山と……神都高千穂の靈山には、新設と強大を誇る 3 社の鋳山と選鋳場が操業を競ふわけで数万の従業員が高千穂一帯の山間に集合し、愈々岩戸は弥栄の都と化するに至るであらう。

1934 年 11 月 11 日延岡新聞「中島商事と 朗らかな報道」

地元での話では無いが最近岩戸鋳山と土々呂精錬工場で県北民に異状のショックを与へつつある中島商事株式会社の姉妹会社中島飛行機製作所が愈よ米国ダグラス機の製作権を買収して同機の製作に着手するとの事であるが、この飛行機 1 台の製作費は 25 万円 12 人乗旅客機で 710 馬力の発動機 2 台装備の単葉機である、しかしこれは表面通信省が乗気になって援助してゐるけれど〇〇としても多大の期待をもつもので、飛行機製作工業は軍事予算によって浮かみ上り天に昇るほどの景気であり新興資本勢力として『中島兄弟』の名は益々有名となりつつあり、この事業は、数量的の増大と単価高騰によって受ける利潤と更に国家の手厚い保護金によって巨大な利潤をあげつつあるのである。

かかる朗らかなニュースを聞くと、中島商事の県北に於ける事業に関心をもちつつある地元民にとっては悪い気持ちはしない。

87-4 土々呂精錬所の建設経過

1934年6月9日延岡新聞「スズの精錬工場 土々呂に決定」

伊形村では2ヶ月前より東京中島商事との間に極秘裡に錫精錬工場誘致運動を行って来たが最近に至り具体化し、去る6日中島商事会社から喜多重役が突然来土車屋旅館で村長並びに村会議員と会見の結果、愈々土々呂字桶郷に錫の精錬工場を建設することに確定し、敷地1万5千坪の買収を美岡高島氏等の買収委員により7日滞りなく終了した。工場建設の着工は7月中旬頃からの予定であるらしく、同工場竣工の暁は見立鉱山では従来錫の精錬を大連及シンガポール方面に送って来たものを一手に引受けることに契約が成立したもやうである。

なほ中島商事会社が土々呂に工場を建設するやうになったのは要するに海陸運輸が非常に便利の関係上同地を選んだものである。

1934年6月14日延岡新聞「木炭がうんと要る 土々呂製錬所が 設立の上は」

錫精錬所は今年末に操業開始となれば、その精錬工程において唯一の原料である錫石の還元剤として木炭が使用されるものとみられ、而るときは天恵の日向物産木炭は輝かしい近代工業の未来に前途を約束されるわけで、木炭の消費部門に新生面を開くものとして期待されている。

1934年6月16日延岡新聞「15町の引込線と 敷地の埋立 計画成って近く出願か」

計画図面によると土々呂駅からの引込線は15町の長きに亘り字桶河の敷地埋立(約1万5千坪といはれてゐる)の範囲其他についてもスッカリ方針が確定したもやうであるから近く県の認可を得る為に正式に出願申請が行はれるものとみられてゐる。

1934年9月5日延岡新聞「中島工場の埋立て けふ公報で発表 一ケ年以内に竣工」

中島工場から県に申請中であった土々呂鯛名地先の倉庫及道路物揚場造成の為めの用地7549坪8合2勺の埋立は4日付けふ県公報で認可の旨発表されたが、工事着工は認可の日より1ヶ月以内で竣工は着手の日より1年以内と限定せられてゐるが、工費は7万8500円である。

1934年10月22日延岡新聞「25日に起工式 土々呂の中島工場」

中島錫精錬所の敷地はほぼ所要の地均しが出来たので、近く工場建設に着手することとなり愈よ来る25日午前10時より工事請負社大倉土木株式会社の手により工場建築工事起工式を左記の通り執行することになった。

1935年1月30日延岡新聞「埋立事業も終り 直ちに建設に着手 土々呂工場の経過」

土々呂中島商事の精錬工場は港湾埋立のために削取った山の地質が意外に硬い岩質であったため敷地の完成が延び延びとなり従って全体の工事が遅延したのであるが、漸く一切の埋立工事が今日完成したので、請負者と、村会議員とが立会ひ受渡を終了したのである。

1935年2月19日延岡新聞「飛躍する港の春 専用線の建設と 棧橋工事 土々呂の二大工事」

日の影線の開通と共に、岩戸、高千穂方面で発掘される鉍石は岡元駅から細島、土々呂海岸に、盛んに輸送されることになってゐるがこの鉄道開通は中島製錬工場建設に拍車をかけ同工事完成は昼夜兼行で急ぐに至ったようだ。而しておそくとも5月頃には操業開始を予定されてゐる。そのために鉄道省と工場では赤水工場に至る間の専用線を建設することになり、請願専用線1軒7分、工場側1軒の線路を敷設することになり、設計測量は完了したものの如くである。しかして将来之の完成の上は該使用鉍石を岩戸鉍山から1日平均40貨車の予定であるが、現在では15噸貨車10台の模様である。なほ現在の槇峰鉍山の錫鉍石は細島港へトラックで搬送してゐるが、この専用線の完成と同時に土々呂へ搬出されることとならう。

なほ一方土々呂港の商船棧橋は5月末には竣工の予定で工事を急いでゐるが、その棧橋の計画は岸壁から90尺の突堤を建設しその尖端へ長さ70尺、幅27尺で6室に区画した浮橋棧橋を二個つなぐのであるから総延長240尺位にならうといふ大規模な棧橋で将来土々呂が有望な商港として一大飛躍を遂げるであらうと観測され港の春の話題となつてゐる。

1935年5月9日延岡新聞「鉄筋コンクリートで 完全を期せる工事 土々呂港棧橋落成 明10日愈よ盛大に挙式」

宮崎県土々呂港は、延岡に於ける人絹工場の大発展と中島商事会社の土々呂港における錫精錬工場の建設と同工場に至る鉄道省側線の延長と相俟って今や枢要なる港湾となり、大阪商船会社にては茲にみる處あり工費4万円を投じ棧橋の建設を企画し、(略)昨年11月17日工を起し170日の時日を費し茲に全く工成り盛大なる落成式を挙げる。

(略) 因に同港棧橋は鉄筋コンクリート製浮橋長さ70尺幅27尺のもの2隻と鉄筋コンクリート製固定橋長さ60尺幅18尺1連とより成り固定橋と浮橋との間には潮の干満に応じ上下し得べき招橋を設け、浮橋2隻の連絡には鉄製渡橋を架設せり。各浮橋、固定橋上には鉄骨『ラーメン』式上家を建設し堂々たるものにして土々呂港に一名所を加ふるに至れり。

1935年12月22日延岡新聞「工事は略ぼ完成 土々呂の中島工場状況」

伊形村土々呂の中島精錬工場近状につき二宮村長は去る 20 日朝出県の車中で左のごとく語った。

「中島精錬工場は 9 分 9 厘迄完成し、操業開始までの段取りとなっておりますが、岩戸工場の方が県当局の許可をまずに用水溝の工事に着手したことが問題となり（略）いよいよ許可となれば操業開始となるので、さうすると、土々呂も同時に操業開始となるが、まづ明春 2 月頃でせう。その間土々呂では鹿児島県から少々づつ鉱石をとり試験的に精錬を行ってゐるが、成績はよいようです。

8 7 - 5 精錬所建設工事

甲斐忠義さんの話（1979 年 1 月 21 日聴取）

私たちが土々呂に来たのは、昭和 10 年の 10 月頃じゃったろか。そのときは、精錬所の建物だけができて、中の溶鉱炉はそのあとに造った。私はそれまで、大分県小野郡長谷川村の上田鉱業尾平鉱山で錫の精錬をしていた。そこの所長だった北沢さんが、土々呂の最初の所長になったんで、錫の精錬を土々呂でやるから来んか、と誘われた。最初の所長が北沢さんで、次が平塚さん。中島の終わるときの所長が糸井一。

最初の中島門吉さんが社長で、中島製錬所といった。岩戸鉱山とはいわなかった。その次に、昭和 17 年に三井製錬所だったでしょうね。

溶鉱炉は私たちが 1 基つくった。ほかに職人が 2 人来て、2 つつくった。全部で 3 つ。北沢さんについてきた野尻さん（いちばん詳しい人）が中心でつくった。溶鉱炉は、1 基に 50~60 トン入れていたんじゃないかな。溶鉱炉は、1 基に 50~60 トン入れていたんじゃないかな。

精錬所を土々呂に建てたのは、錫鉱石をひとところに集めるつもり。土呂久、木浦、日本国中の錫を寄せるつもり。船で持ってくるつもりで、船着き場もでていた。鉄道もここまで持ってくるつもりでした。

錫の精錬所は、仏印、タイ国から入れるので、日本にはいらんごとになった。仏印、タイには、砂んごつした鉱石がある。タイからきた砂の錫を川からあげた。仏印は鉛やら不純物が多かった。これを袋詰めしてきて、ここで吹いたんですよ。盛大なときは 50 人くらいおったろか。村の人が多かったですよ。三池になってコバルトの精錬をした。私どもはやらんづくです。

反射炉の煙突はそう高いことない。硫黄の臭いがした。交代交代で焼いたから、わしもやった。煙は白いやつがでた。屋根が白くなることはなかった。亜ヒの多いのを土呂久の反射炉で焼いた。スズの質の良いのを精錬所の反射炉で焼いた。

溶鉱炉の煙突（50m）のきわの木が枯れていた。最後は地をはわらせてすぐそばの山に煙突を建てた。そのきわの木が枯れた。製錬所のうしろの山は、吉野桜がいっぱい植えてあった。残っちょるのは直径 50 cm くらい。太うなっちょる。

長浜に所長の社宅や社員社宅がいっぱいあった。独身寮もあった。ここは「地獄谷」と

いうて、名前がよくない。人もおずがって、よう通らんとこです。お寺なんかがあったんでしょ。

86-6 岩戸鉱山（錫精錬）から三井金属（コバルト精錬）へ 市山幸著作「太平洋戦争 延岡空襲戦災記」P113~114

軍需生産のために、化学関係にも機械方面にも金属材料の需要が高まるばかりでした。そこで、西臼杵郡高千穂町にあった「中島鉱山株式会社」も動員されることになって所長内海東男氏、支配人北弁吉氏も活躍され、土呂久中野内から錫鉱を採掘、岩戸の東岸寺地区に選鉱所をつくりました。

その後更に発展して、昭和10年6月、中島飛行機の社長中島知久平氏の弟中島門吉氏が社長で、当時は新聞にも華々しく宣伝され、“中島工業王国土々呂に出現”と言うことで、土々呂製錬所が実現することになりました。所長は平塚保明氏で、旭化成刈谷亨さんの同級生でした。地元では、大歓迎（村長二宮林太郎）されて色々の面で緊密な協力体制も出来、発展しました。従業員は80名位で、錫の製錬は月産50トンで、昭和16年迄は全盛を極めたものでした。私達の知る児玉儀兵衛（現日高勝三郎商店）さんは昭和9年3月、小野勇氏、磯崎氏と延商卒業と共に中島鉱山の高千穂土呂久の会社に採用され、土々呂に製錬所が出来た時に、児玉氏は土々呂勤務となり、購買関係担当の主任でした。

昭和17年、マレー半島を日本軍が占領する様になり、錫はいくらでも入手出来ることになり、技術者はマライ方面に転勤されることになりました。然し戦況は逆転し、昭和18年から9年には悪化し、軍需大臣岸信介氏から「錫の製造はもうよろしい、直ちに飛行機の風防硝子用のコバルト製造に切替を」と言うことで、会社を三井金属鉱山（大牟田市）に譲ることになり、三池製錬所土々呂工場として新発足、軍需指定工場となりました。従業員はやっぱり80名位、原石は南米産で19年8月から生産に入りました。

87-7 三池製錬所の分場

「九州の金属鉱業」P18より

昭和19年（1944）三井鉱山株式会社がこれ（土々呂の錫製錬所）を買収し、三池製錬所の分場として山口県太田町長登鉱山のコバルト鉱の精錬に使用した。

「大牟田市史（中）」

P818

昭和18年1月 中島鉱業土々呂工場を譲り受け、コバルト製錬を開始

P1018

昭和26年10月 宮崎県土々呂工場を売却

87-8 延岡市と伊形村・東海村の合併

出典不明

延岡市は昭和11年(1936)に東臼杵郡^{いがた}伊形村と東海村を合併し、人口は男子3万8647人、女子4万465人、合計7万9112人となり、前年より2万3567人増加した。